

「ホームレス」の居住地移動と 愛着の関連についての一考察

～多摩地域における調査を題材に～

Relationship between Residential Movement and Attachment of a Homelessness Person : Interview Survey in Tama Region

遠 藤 康 裕
ENDO Yasuhiro

【要旨】本研究は四年間にわたり多摩地域 B 市において実施した路上生活者へのインタビュー調査を題材としている。調査では東京都下における路上生活者の人々の実態と課題を明らかにすることを目的とし、路上生活者の職歴や居住地の移動も含めた生活歴について半構造化インタビューの形式を採用した。

「ホームレス」の居住地移動について、調査対象者を①出生からインタビュー時点までの期間の多くを多摩地域に居住していたと語るケース、②就職・転職の過程で多摩地域外から多摩地域に移動してきたケースに大別できた。

一方で、B 市・多摩地域への愛着が居住地移動にどのように影響したかについては十分に検討することができなかった。居住地移動に関して、愛着以外の指標についても検討に加える必要がある。

【キーワード】路上生活者、「ホームレス」、職業移動・居住地移動、多摩地域

1. はじめに（問題関心）

筆者は 2016 から 2018 年、2021 年と計四年間にわたり、法政大学社会学部において路上生活者のインタビュー調査を行った（以下、本調査と表記。研究代表者：堅田香緒里・法政大学准教授）。本調査は法政大学社会学部の政策研究実習、社会調査実習の授業の一環として行われ、調査結果については各年で報告書が刊行されている（法政大学社会学部 2017；2018；2019；2022）。本調査は東京都区部の A 区と東京都市町部（以下、多摩地域）の B 市を調査地域とし、路上生活歴のある者を対象に生活歴の聞き取り調査をおこなった。また筆者も調査設計段階から関わっている。調査の詳細については後述する。

本調査から、次のような傾向が見えた。それは A 区にて調査を行った路上生活者の出身地は全国に広がっているのに対して、B 市にて調査を行った路上生活者の出身地は比較的多摩地域が多く見受けられたことである（遠藤 2017；2018）。路上生活者が集まる要因として、周辺部と比較してカネを稼ぐ手段へアクセス可能であること、生活できる環境・インフラがあること、それらを含めた利便性が高いことが考えられるが、そうであるのならば、B 市においてインタビューを行った者は、B 市や多摩地域に留まるのではなく、仕事や充実したインフラを求めて都心部に行

くのではないかという疑問が生じた。筆者はその理由を彼らがB市や多摩地域の土地・地域に対してなんらかの愛着を抱いて移動・滞留を行っているためではないかと考えた。本稿は本調査の結果をもとに、B市でのインタビュー対象者が居住地移動に関してB市・多摩地域に対する愛着をどう語っているか検討を試みるものである。

2. 本稿における枠組み

2-1. 本調査について

本調査は東京都下において路上生活状態にある人々（元路上生活者を含む、以下路上生活者と表記する）の生活課題や支援の在り方について探ることをテーマとした。また、路上生活者の生活課題や社会福祉・社会保障制度からの排除、地域からの排除に焦点をあて、東京都下における路上生活者の人々の実態と課題を明らかにすることを目的とした。そのため路上生活者自身にこれまでの生活や、日常生活での課題などについてインタビューを行った。インタビューでは半構造化インタビューの形式を採用した。

また、本調査では都心部と郊外部での路上生活者の実態の異同にも関心を払った。路上生活者調査は各都心部を対象としたものが多く、東京都下では23区を対象としたものが主であり、東京都郊外部における路上生活者の実態についても十分に把握することが必要であると考えた¹⁾。そこで調査実施地域をA区²⁾とB市³⁾に設定し、A区の路上生活者支援団体⁴⁾とB市の路上生活者支援団体⁵⁾にて調査を実施した。

A区、B市ともに路上生活者を対象として調査を実施したが、結果的に路上生活を経験したことのない者も利用者インタビューに含まれることになった⁶⁾。

倫理的配慮について、インタビュー対象者には調査趣旨を十分に説明し、同意を得られた場合にのみインタビューを行っている。録音の許可が得られなかった場合はインタビューした内容は調査に使用しない対応を取った。以下、本文中に掲載されている名前はすべて仮名である。

本稿では先述の関心に基づいて、本調査で得られた結果のうちB市において得られた結果のみを用いる。四年間を通した調査日程(B市)は図表1の通りである。

回答数は次の通りである。2016年度は14名、2017年度は16名

図表1：調査日程(B市のみ)

日 付	時 間	調査場所
2016/8/10 (水)	12時～15時	施設 S
8/12 (金)	12時30分～15時	施設 S
8/14 (日)	15時～16時15分	公園 T
8/15 (月)	12時30分～15時30分	施設 S
9/9 (金)	16時～18時10分	施設 S
2017/8/4 (金)	12時～15時30分	T 川河川敷
8/8 (火)	12時～14時20分	施設 S
8/13 (日)	9時～15時	公園 T
9/8 (金)	12時～14時10分	施設 S
10/1 (日)	11時30分～15時	T 川河川敷
2018/7/20 (金)	12時～13時	施設 S
8/3 (金)	14時～16時	施設 S
8/10 (金)	14時～16時	施設 S
2021/10/22 (金)	14時～15時15分	施設 S
11/5 (金)	14時～16時	施設 S、T 川河川敷
11/12 (金)	14時～16時	施設 S
11/19 (金)	14時～16時	施設 S
11/26 (金)	14時～16時	施設 S

(うち録音拒否1名)、2018年度は9名、2021年度は10名(うち録音拒否1名)の合計31名であった。

性別の内訳は31名のうち女性が1名で30名が男性である。

初回調査時の年齢は30代が1名、40代が男性6名、女性1名、50代が7名、60代が12名、70代が3名、80代以上が1名となっている。20代以下は該当者がいなかった。

最終学歴は中卒が10名、高校中退が4名、高卒が10名、専門学校卒が男性4名、女性1名、大卒が2名となっている。

インタビュー時の居住形態は「路上」が7名、「路上とネットカフェを行き来している」が1名、「寮」が2名、「グループホーム」が4名、「アパート」が男性16名、女性1名となっている。複数年にわたってインタビューを行った者については初回年度での居住形態を採用している。

また路上経験の有無については「路上歴あり」が22名、「路上歴なし」が男性8名、女性1名で9名となっている。路上生活の期間については「1年未満」が5名で最多、ついで「5年以上10年未満」「1年以上3年未満」が4名、「10年以上」が3名となっている。

本稿と一連の研究における居住地移動について、居住地はどこに住んでいたかを表す。その分類については遠藤(2017)において8地方区分に修正を加え、次の12通りに出身地域を設定した(遠藤2017:2018:2019a:2019b:2022:2023)。

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">①「管内」: 調査対象であるB市②「管外区」: 東京都区部③「管外市町」: 調査対象以外の東京都市町部=多摩地域④「北海道」⑤「東北」: 青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島の6県⑥「関東」: 神奈川、埼玉、千葉、栃木、茨木、群馬の6県⑦「中部」: 新潟、富山、石川、福井、長野、岐阜、山梨、静岡、愛知の9県⑧「近畿」: 大阪、奈良、京都、兵庫、滋賀、三重、和歌山の2府5県⑨「中国」: 岡山、広島、鳥取、島根、山口の5県⑩「四国」: 香川、徳島、愛媛、高知の4県⑪「九州」: 福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄の8県⑫「海外」: 日本以外の国 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

また職種はどのような種類の職業に就いていたか、あるいは無職であったかを表す。職種について、日本標準職業分類の中分類までを参考に「管理職」「専門・技術職」「事務職」「販売員」「営業職」「家政婦・家事手伝い」「サービス業」「保安」「農林・漁業」「製造業」「運輸・流通」「建設・土木」「鉱業」「港湾」「その他」「無職」と設定した(遠藤2018:2019a:2022:2023)。

2-2 本稿での分析対象について

本稿での分析対象は不安定居住者としての「ホームレス」とする。日本においてホームレスとは、「ホームレスの自立等に関する特別措置法(2002年8月7日公布・施行。平成14年法律第105号)」にてその呼称が使用、その第2条において『「ホームレス」とは都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者』と規定されている。このことから日本ではホームレスとは呼称されていても実際には路上生活者(=野宿者、ループレス)が対象とされていることが分かる。

路上生活者は常に路上において生活しているわけではなく、手持ちの金銭があるときはマンガ喫茶やネットカフェに代表されるような施設で寝泊まりする不安定居住者の面も有している。そして路上生活と不安定居住の間には相当な行き来がみられることが指摘されている(厚生労働省2007b)。本調査は路上生活者を対象として実施され、不安定居住者を含めた調査結果を得た。本稿では上記の路上生活と不安定居住の間での行き来があることを念頭に、本調査結果を分析に用いるものとする。

2-3 居住地の移動について

路上生活者は、職を求めて大都市圏への移動を行うのが典型的であるとの理解がされている。地方から建築・土木業などへの就職と共に大都市圏に来て、飯場などに居住しながら大都市近隣を転々とするも、失職と同時に路上生活化しそのまま大都市圏に残る、というものである(図表2)⁷⁾。

図表2：典型的な路上生活者の移動概念図



出典：筆者作成

ここでは路上生活者は就職に伴って出生地から大都市圏へ移動(移動1)を行うことが多くなり、そこから路上生活化を挟んだ現在地への移動(移動2)は、近隣自治体であった、それまでの仕事などでなじみがあったというものが多くなることが考えられる。

本稿ではこうした典型的な路上生活者像ないしその生活歴に若干の修正を加えることを試みる(図表3)。具体的には多摩地域で出生した者は就職に伴った移動を行うが、大都市圏への移動よりも愛着のある近場の多摩地域で就職することを選ぶ(移動3)。また路上生活化ないし不安定居住化した後も愛着のある近隣の多摩地域に留まる(移動4)という想定をする。

図表 3：本稿で想定する「ホームレス」の移動概念図（多摩地域）



出典：筆者作成

2-4 愛着について

居住地への愛着について、まず場所への愛着については、“人間と場所の絆” (the bonding of people to places) のこととされ (Low and Altman, 1992)、ここに感情的な意味を加えた“人間と場所との感情的な絆”とする定義が多く見られる (Riley, 1992 ; Rubinstein & Parmelee, 1992 ; Kaltenborn, 1997 ; Hidalgo & Hernandez, 2001 ; Jorgensen & Stedman, 2001)。

住む場所への愛着については以下のような整理がされている。園田美保は、日常的な行為の総体である「住まう」という行為を理解する場合、場所への愛着という観点から見ていく事はその深い理解にとって有用であり (園田 2002 : 187-188)、「深い意味での住まうという現象は場所への愛着という現象と多大な重なりをもち、肯定的なものも否定的なものも含め、何かしらの絆を住区に対して感じる事」であるとしている (ibid : 187)。

また、居住地と愛着の関係性については、高齢者の土地への愛着を研究した田原裕子・神谷浩夫が次のように指摘している。工業化進展以前の社会では、高齢者が生まれた／結婚してから関係性を積み重ねてきた住み慣れた場所は、老後の経済的安定や介護・支援を保障し、精神的な安定を保障する唯一の場所であり、住み続けることが当然であった。しかし、工業化の進展と社会の変動によって、住み慣れた場所の意味や機能は次のように変化した。①親にとっての住み慣れた場所に子どもも住み続けるとは限らなくなった、②年金が主たる収入源として見込めるものとなったことで居住地移動の自由を獲得した、③地域社会が果たしていた高齢者支援機能が弱体化したことで、生活に必要な条件をすべて満たす場所たりえなくなった (田原・神谷 2002 : 210-211)⁸⁾。田原・神谷 (2002) は高齢者が住み慣れた場所に留まり続ける選択をする／転居を決意する様子を描いているが、そこでは高齢者が身体的自立度の低下、子どもとの別居や厳しい自然条件など移動を促す要素がある一方で、日常生活での活動、地域住民との交流やこれまで過ごしてきたことへのある種の自負によって住み続ける選択をする状況が描き出されている。

路上生活者についてみれば、岩田正美は路上生活化した後の「地域移動の理由は、基本的にその日、あるいは明日の『生きていく場所』探しである」と指摘している⁹⁾。また、その移動は仕事や、仕事の情報、病院や福祉の介在、「『土地勘がある』という言葉に代表されるように、なじみのある場所や知人をたどった移動」(傍点筆者)によって促されるとしている (岩田 2000 : 86)。

それでは、愛着をどのように捉え、路上生活者の地域に対する愛着をどのようにインタビューから抽出するか。本稿では相澤亮太郎と引地博之の研究枠組みを援用する。相澤は神戸市在住の者を対象にライフストーリーインタビューを行い、その語りの中から場所への愛着の性質、形成過程や構成要素の検討を試みた。そして、検討を通して大きく次の三点の要素が場所への愛着に

かかわっていることを指摘している。すなわち、①自然、生活施設、建造物、風景、人間関係、思い出といった場所を構成している様々な要素(場所の要素¹⁰⁾)、②性、民族、職業や生活経験の違いといった主体の属性、立場や状況、③戦災や災害による場所の破壊や、転居や長期旅行などで場所との距離が出来る事¹¹⁾である(相澤 2002: 29-31)。

また引地は居住地の環境を物理的環境と社会的環境に分け、それらと居住年数が地域への愛着に影響しているとの仮説に基づいて検討を行った。ここでは景観、歴史的風景、ランドマーク、医療施設、特産物を物理的環境、住民との交流、イベント、住民の人柄、治安を社会的環境としている。また地域への愛着を定住志向、所属意識、土地の重要さ、住民の重要さ、住みやすさで表している(引地 2009: 104)。

本稿ではこれらを踏まえ居住地への愛着を“B市・多摩地域での生活・印象(物理的要素)と職業、住民・親族との人間関係(社会的要素)を通して発生した、その土地への感情的な結びつき”と捉えてインタビューから抽出する。

また本稿ではB市だけではなく、B市を含めた多摩地域での居住年について明確に語られた範囲で抽出した。B市だけの居住年としなかった理由は、一つには多くのケースで多摩地域内を転々と“滞留している”ことが語られているためであるし、また一定の地域的な広がりを考慮することは、岩田正美の指摘する路上生活者の「一部離れた地域を含む移動」や「かなり広域の移動」(岩田 2000: 92)と矛盾しないためである。

本稿はこのような分析枠組みのもとで「ホームレス」の語りの中から、B市・多摩地域での生活・印象と職業、住民・親族との人間関係が語られているかを抽出することで、居住地移動と愛着の関わりを明らかにすることを目的とする¹²⁾。

3 「ホームレス」の移動と愛着

初職就職時に起こった移動(移動1または移動3)と路上生活化／不安定居住化時の移動(移動2または移動4)について整理すると、出生からインタビュー時点までの期間の多くを多摩地域で居住していたと語るケース(多摩居住ケース)、就職・転職の過程で多摩地域外から多摩地域に移動してきたケース(多摩転入ケース)に大別できる。本稿では多摩居住ケースに12名、多摩転入ケースに19名を分類した。「出生からインタビュー時までの期間の多く」を具体的にどれくらいの期間で区分するかは、対象者の年齢が異なることや、それぞれの経歴が異なることから一律に設定することは困難である。本稿ではおおよその年数やインタビューでの語りから暫定的に設定した。

3-1 多摩居住ケース

多摩居住ケースに該当した者は図表4の通りである。初職就職に伴う移動(移動3)については多くが多摩地域内での移動か、もしくは多摩地域内で出生し初職に就いた際にも移動を行っていないことがうかがえる。

図表 4：多摩居住ケースにおける移動とおおよその滞在期間

仮名	年齢	移動 3	移動 4	備考
石原	30 代	「関東」⇒多摩地域⇒B 市⇒多摩地域	多摩地域⇒B 市路上	多摩滞在期間 10 年以上 路上期間 2 年
寺田	40 代	多摩地域⇒「中部」	多摩地域⇒B 市	多摩滞在期間 20 年 路上期間 3 週間
辺見	40 代	多摩地域（移動なし）	多摩地域⇒B 市路上	多摩滞在期間 40 年 路上期間 10 年
秋元	50 代	多摩地域（移動なし）	多摩地域⇒多摩地域路上	多摩滞在期間 50 年 路上期間 1 日
玄田	50 代	多摩地域（移動なし）	多摩地域⇒B 市	多摩滞在期間 40 年 路上期間 3 年
瀬川	50 代	「関東」⇒多摩地域⇒B 市	B 市（移動なし）	多摩滞在期間 50 年 路上期間なし
三谷	50 代	多摩地域（移動なし）	多摩地域⇒B 市	多摩滞在期間 50 年 路上期間 10 年以上
鈴木	60 代	多摩地域（移動なし）	B 市⇒B 市路上	多摩滞在期間 60 年 路上期間 1 年
鍋島	60 代	多摩地域⇒B 市	B 市（移動なし）	多摩滞在期間 60 年 路上期間なし
向井	60 代	「関東」⇒東京⇒多摩地域	多摩地域⇒多摩地域路上	多摩滞在期間 40 年 路上期間 10 年以上
斎藤	70 代	B 市（移動なし）	B 市⇒B 市路上	多摩滞在期間 70 年 路上期間「何十年、長い」
志村	70 代	「関東」⇒B 市	B 市⇒B 市路上	多摩滞在期間 50 年 路上期間 3 年

出典：筆者作成

このケースで語られた移動は次のようなものであった。石原さんは入所している児童養護施設が変更になり B 市へ移動してきた。また瀬川さん、向井さん、鍋島さんと志村さんはいずれも学齢期に B 市・多摩地域に引っ越ししてきた。そして辺見さん、秋元さん、玄田さん、三谷さん、鈴木さん、斎藤さんと志村さんは初職就職後も実家から勤務していた。唯一、寺田さんのみが「やくざに憧れて」多摩地域からの転出を経験している。彼らのうち、瀬川さん、玄田さんを除いた全員が高卒以下の比較的低学歴で職業生活に移行している。

ここでは、B 市・多摩地域に居住し続けることに対して、次のような語りが見られた。

（調査者：工場で働いていた時はどこに住んでいましたか？）

いや、地元、実家です。実家からほとんど通ってて、

（秋元さん 50 代 アパート生活 2017 年調査）

15 歳で働いて結局家あの貧しかったんで、あの、家にお金を入れなきゃいけないってことで働いて一年とか全然お金もらえませんでした。

（志村さん 60 代 アパート生活 2021 年調査）

（その頃はどこに住まわれてんですか？）ずっと B 市です、住まいは。普通に場所が移っても B は B で。ずっとやってました。他（注：の土地）には出ない。住めば都、いいとこ

ろですよ（笑）（中略）やっぱり、慣れてるし、友達もいるし、住めば都で住みやすいし、うん。どっか行こうって考えたことはないな。

（鍋島さん 60代 アパート生活 2021年調査）

初職就職の後、路上生活化／不安定居住化する（移動4）までの間に多くの者が転職を経験している。転職を重ねる過程で生活の貧困化・不安定化が進行する路上生活者の生活歴についての典型的な理解と矛盾しない結果といえる。路上生活化・不安定生活化の場面においては、路上生活歴のない瀬川さん、鍋島さんは移動を行っていないが、路上生活を経験している者はB市を含めた多摩地域内での滞留を経験している。

たとえば、環境の変化が生活の不安定化につながったと思われる語りがみられた。

二十歳になって、施設が、あの（出なきゃいけないから）そう、出なきゃいけないから、アパート見つけて、入ったんですよ、工場から近くの、アパート入って……ただ、そこからその…自分のグダグダ生活が始まったっていう感じですよ。

（石原さん 30代 グループホーム生活 2018年調査）

きったねえ寮、無低ってやつ。無料宿泊所ってやつ。第1回。そこに住んで、行かされた。（中略）（その無低での生活って？）やばいね。いやー、無低な、木造なの木造。昭和の初期の、知らないけど。寮をね、改造したらしい。会社の寮を。昭和だから、畳で、6畳くらいあるかい。ベット2個置いてあって、そんだけ。テレビもねえし。やばいやばいやばい。（6畳に一人二人がいるってことですか）そうそう、相部屋相部屋。当然相部屋ですよ。変なじじいと、しかも、80過ぎの。

（玄田さん 50代 路上生活 2021年調査）

石原さんは初職を解雇された後、退所期限から児童養護施設を出ることとなった。近隣の多摩地域で派遣労働に就き、職場の近くにアパートを借りた。人の目が無くなったことで「グダグダ生活」を送るようになり、生活バランスを崩してアパートを飛び出したと語る。

また、玄田さんは親が亡くなったことを契機に実家を出た。多摩地域内で居住していたがその過程で無料低額宿泊施設へと至ったという。「昭和の初期の」「やばい」施設での生活は玄田さんにとって耐えがたいもので、約半年で施設を飛び出し路上生活をするようになったという。この他にも、B市で暮らしていたものの「妻と別れて部屋を失った」と生活が不安定化・路上生活化したいきさつを語った斎藤さん、転職を繰り返す過程でネットカフェで生活するようになり、「ネットカフェ生活ではお金がたまらない、1日落ちていて寝てられない」として路上生活をするようになった向井さんや実家で生活していたもののアルバイトの給料では生活していけないと家を出たという鈴木さんの語りがみられた。

環境の変化が生活に影響を与えたとする語りがあった一方で、家族とのかかわりが生活の不安定化を引き起こしたことが語られたケースもみられた。

仕事をしたくないというのがあって、うん、で、それで、ね、休んでいる家にいるじゃない

ですか……。家にいたって、ね、あのう、自分に収入がないんだから、ね、やっぱ、食べるものもないし……。うーん。あと、うん、行かなくなって、うん、家にいるのが辛くなったんですね。

(三谷さん 50代 路上生活 2021年調査)

三谷さんは失業中一時的に路上生活を挟みながらアルバイトをしていたが、ある時拘置所に収容された。拘置所から引き取られて実家に戻るも、家族から働くように言われたことに反発して路上へ飛び出したという。

ここでは家族とのかかわりが生活の不安定化に繋がったことがうかがえるが、拘置所出所後の社会的包摂の困難や、労働規範との葛藤も考えられる。

3-2 多摩転入ケース

次に多摩転入ケースについて該当した者は図表5の通りである。出身地が全国に散らばっており、初職就職に伴う移動（移動1）も多様である。初職の移動先として東京が選択されないケースもある。

図表5：多摩転入ケースにおける移動とおおよその滞在期間

仮名	年齢	移動3	移動4	備考
杉浦	40代	「中部」⇒東京⇒「中部」	「中部」⇒B市	多摩滞在期間6ヶ月 路上期間1週間
染谷	40代	移動経路不詳	多摩地域⇒路上(多摩地域滞留)	多摩滞在期間10年 路上期間8年
千葉	40代	「管外区」⇒「管外区」	多摩地域⇒B市	多摩滞在期間10年未満 路上期間なし
手塚	40代	「関東」(移動なし)	多摩地域⇒「管外区」	多摩滞在期間1年未満? 路上期間なし
関根	50代	「中部」⇒「中部」	B市⇒B市(路上)	多摩滞在期間10年 路上期間2年
曾我	50代	「関東」⇒「関東」	多摩地域⇒B市	多摩滞在期間2年 不安定居住期間あり
八木	50代	「管外区」⇒「管外区」	多摩地域	多摩滞在期間30年 路上期間なし
六角	50代	「東北」⇒多摩地域	「関東」⇒多摩地域⇒B市	多摩滞在期間20年以上 路上期間2年
毛塚	60代	「九州」⇒全国	B市⇒B市(路上)	多摩滞在期間30年 路上期間1ヶ月
内藤	60代	「東北」⇒「管外区」	多摩地域(路上)⇒B市	多摩滞在期間不詳 路上期間あり
根岸	60代	「中部」⇒「管外区」	移動経路不詳	多摩滞在期間約3年 路上期間約3年
橋口	60代	「九州」⇒「近畿」	東京⇒B市	多摩滞在期間20年 路上期間なし
藤村	60代	「九州」⇒東京	多摩地域⇒B市(路上)	多摩滞在期間5年 路上期間5年
松中	60代	「関東」(移動なし)	多摩地域⇒B市(路上)	多摩滞在期間20年 路上期間10年
目黒	60代	「北海道」⇒「管外区」	首都圏⇒路上	35年前にはじめて滞在 路上期間10年以上
脇田	60代	「管外区」(移動なし)	多摩地域⇒B市(路上)	多摩滞在期間5年未満 路上期間1ヶ月
毛利	70代	「東北」⇒「管外区」⇒「北海道」	B市⇒B市	多摩滞在期間40年 路上期間なし
弓削	70代	「東北」⇒東京	東京⇒多摩地域	多摩滞在期間40年 路上期間なし
桐生	90代	「関東」⇒東京	「関東」⇒B市	多摩滞在期間10年以上 路上期間なし

出典：筆者作成

このケースで語られた移動は次のようなものであった。「中部」出身の杉浦さんは東京の専門学校に通い、地元の「中部」に戻って就職している。同じく「中部」出身の関根さんは中卒で職業訓練校に通い、地元とは異なる「中部」の都市にある企業に就職している。同様に「九州」出身の橋口さんは初職就職時に「近畿」の都市に移動している。また「九州」出身の毛塚さんは調理師という職業柄日本全国を回ったと語った。毛利さんは学齢期には「管外区」に居住しており、高卒後に画家になることを目指していたが、親に反対されたため親戚のいる「北海道」へ家出したと語った。

一方で初職就職を機に東京へ移動した者もいる。「東北」出身の六角さんは専門学校卒後、多摩地域の企業に専門・技術職として就職した。同じく「東北」出身の内藤さんは中卒後集団就職で「管外区」へ移動している。「東北」出身の弓削さんは父の就業に合わせて上京したことが語られている。「北海道」生まれの目黒さんは大学進学時に上京しており、卒業後はそのまま都内の企業に就職している。「九州」生まれの藤村さんは兄弟の一番下で、中卒で兄を頼って上京してきたと語る。

「関東」生まれの松中さんや「管外区」生まれの脇田さんはともに中卒で就労しているが、就職後も実家に居住し続けている。「関東」生まれの手塚さんは大学を卒業後、専門を生かした職場に就職している。「関東」生まれの曾我さんは高卒で就職後、「関東」にある会社の寮に入居している。「管外区」生まれの八木さんは高卒後、「管外区」において住み込みで就業を開始した。同様に千葉さんは高校中退を機に就労を開始。「管外区」から別の「管外区」へ住み込みで働くようになった。

この多摩転入ケースにおいても、初職就職の後、路上生活化／不安定居住化する（移動2）までの間、多くの者が転職や居住地の移動を経験している。

六角さんは初職をリストラされた後、別会社に派遣として雇用され社宅のある「関東」各地を転々とするようになる。失職後路上生活化し、多摩地域近傍の都市から歩いて移動し、最終的にB市に至っている¹³⁾。同様に転職による移動と失職による路上化を経験したケースとして目黒さん、染谷さん、松中さん、藤村さんがいる。目黒さんと松中さんは自身の体調の問題、染谷さんはリーマンショックを契機とする解雇、藤村さんは飲酒と家賃滞納について語られた。

このようなケースのほかに、就業上のトラブルを要因として生活の不安定化・路上化につながったとする語りもあった。

姉さんの旦那さんが中華料理屋やってて。そこも10年くらいいたかなあ。それから…やっぱそういう仕事に、電気の仕事以外。調理の仕事が、ずっと続けてやってきましたね。まあ中華ばかりじゃなく、和食、まあ洋食もちょこっと経験ありますけど、まあ色々。まあなぜ辞めたかという、やっぱ身内同士ってどうしてもねお互いわがままを言うから、給料もね、満足にしてくれないし、でもう若い時からもう酒も覚えちゃったから。まあ色々転々として、でまあその後ですかね、働く意欲っていうかなんて言うかな…もうどうにでもなれて言う感じになったのが、今から3、4年前。ちょっとホームレス1年2年くらいやってたかな。
(関根さん 50代 グループホーム生活 2016年調査)

(どれくらい働いてたんでしたっけ？そこの▽▽の所)2年くらいですね。(で、2年働いて、

二月分しか、もらえなかった) そーうそーうそーうそーう。…あとの一あとの全然、全然、全然もらってません。
(内藤さん 60代 「寮」生活 2016年調査)

地元で10年間働いた仕事も、いろいろあって、もう仕事いやになって、東京に行けば路上でもなんとかかなかなと思ってね、なんの考えもなしに仕事空けて出てきたんですね、高速バスに乗って。xxまで来て、xxで1週間くらいいたのかな。ネットカフェ泊まったりとか。泊まって。いてね。で所持金もなくなってxx公園いたわけですね。夏の時期だと思うんですけど。路上に至ってもホームレスしていたという経験はないですそんなに。2、3日しかないから路上に。
(曾我さん 50代 アパート生活 2021年調査)

給与不払いなどで折り合わず、十年働いた職場からある日「フラッと」東京へ出てきた曾我さん、関根さんは働くことへの意欲を失いその後家賃が払えなくなり路上生活化している。内藤さんは給与が払われないことに不満を抱き、夜中に寮を抜け出したと語った。

こうした語りのほかに、脇田さんは親が亡くなったことで「管外区」から「関東」の都市に移住し、その後「関東」内の居所を転々とする生活を送るようになったという¹⁴⁾。また橋口さんは、路上経験はないものの「近畿」や「中部」での就業を経て、東京で土木・建築業に就いた。飯場を転々とする中でB市にたどり着いたという。また、転職先で体調を崩し、東京へ戻り入院することとなった八木さん、統合失調症と診断された千葉さんやケースワーカーに紹介され「精神病院」へ入院することとなった毛利さんのように、入所施設の所在の関係で多摩地域へ移動したとする語りも見られた。

3-3 語りの中での愛着

遠藤(2019b)でも指摘していたことではあるが、本稿においてもB市・多摩地域への愛着が東京都区部への移動をさせなかったかどうかは確認できなかった。しかし、長期の多摩滞在期間によって形成された人間関係や家族関係が、十分とはいえないまでもセーフティネットとして機能していることや、あるいは単にB市・多摩地域が東京郊外の中で交通が発達して、様々な施設が充実して利用しがいのある街として認知されていることはうかがえた。

本稿では愛着を“B市・多摩地域での生活・印象(物理的要素)と職業、住民・親族との人間関係(社会的要素)を通して発生した、その土地への感情的な結びつき”と定義したが、多摩居住ケースと多摩転入ケースとでは指し示す内容が微妙に異なることが考えられる。

たとえば多摩居住ケースにおいてB市・多摩地域での生活・印象は長期の滞在期間に支えられた日々の生活そのものであり、職業はパーソナルな、あるいは近隣からの紹介によってもたらされる地域に紐づいたものである側面を有していよう。そして親族との関係は相対的に濃密であろう。日々の生活そのものが居住地への印象に結びつくことは、鍋島さんのように「住めば都、いいところですよ」と肯定的に語れるようになる可能性を有しているが、それはすべての住人にとって日々の生活が肯定的なものとなることを意味しない。長期間の生活が強固な肯定的印象を形成することもあれば、反対に強固な否定的印象を形成することも考えられる。また、職業のパーソナルなつながりや親族との濃密な関係が必ずしもプラスに働くとは限らず、三谷さんのように同

居家族から働くように言われたことに反発して路上へ出ることもあれば、斎藤さんのように離婚を契機として路上生活化すること、石原さんのように施設を出て一人暮らしを始めたことをきっかけに路上生活化することもある。こうした路上生活化の語りからは、実家に居づらくなったときに泊まりに行ける友人宅があったこと、行くあてのなかったときに帰ることのできる実家があったことなど強みととらえられるものもみられたが、地域の中での重層的なつながりに乏しければ生活の不安定化・路上化のリスクが高まる可能性が示唆される。

他方で多摩転入ケースではB市・多摩地域での生活・印象は相対的に希薄であろう。六角さんのように明確に交通網が発達していることを理由として移動する者もいれば¹⁵⁾、病院、各種施設の所在の関係で入院・通院後にB市・多摩地域で居住することになる者もある¹⁶⁾。その一方で他所に移住するつもりが、B市の居心地が良かったからと移住先を変更した杉浦さんのケースもある。多摩居住ケース、多摩転入ケースでみられたこれらの語りからは、まったく愛着がないわけではないものの、どの程度影響を及ぼしたかは判然としない、と指摘することは可能であろう。居住地移動の理由として、愛着以外の指標、たとえば都市の規模、就職可能な事業所の数といった指標も併せて考慮に入れる必要があると考える。

4 おわりに

国の路上生活者調査の上では、路上生活者の数は急速に減りつつあり、一見すると問題は早晩解決するのではないかとさえ思えてしまう。しかし、コロナ禍を通して私たちの社会は思いがけない失業リスクとそれに付随する路上生活化リスクが足元に広がっていることを認識したはずである。そこまで考慮すれば路上生活者問題とは、単に路上から見えなくなれば終結する問題ではなく、路上の周囲にあって路上との行き来のある不安定居住の問題や、生活上の困難を抱えたときに重層的に受け止めることのできる一少なくとも、即路上に飛び出さざるをえなくなるのではない—生活圏を形成できるかどうかという問題だと気づけないだろうか。

本稿において、「ホームレス」の居住地移動と愛着の関わりを明らかにするという目的は十分に果たせなかったかもしれない。しかし、その過程で新たな課題も浮かび上がったように思われる。石黒格は青森県出身者の地域移動の分析を通して、学力・経済的に有利な若者には大都市への移動の誘因があり、相対的に不利な若者にはそうした誘因はない代わりにサポータティブな社会関係が出身地に留まる誘因として機能する、としている(石黒 2018: 33)。地域の違いや対象者の年代の違いなど単純な比較はできないが、多摩地域と東京都心部の関係性を考えると示唆的であると思われる。今後の検討課題としたい。

注

- 1) 日本の路上生活者研究が日雇い研究、浮浪者研究の延長として行われてきたことや、路上生活者が都市部に多く存在していることを反映していることにも留意しなければならない。
- 2) A区は23区の中心に位置しており、多数の鉄道路線と日本有数のターミナル駅を有している。大規模な繁華街や広大な地下街が形成されており、古紙回収や空き缶拾いなどの都市雑業もみられる。
- 3) B市は多摩地域の中心として多くの市に接しており、市内を流れる川や上水を有している。交通網は複数のJR線、私鉄やバス路線が張り巡らされており、東京都心へも一時間かからずに出ることが可能である。
- 4) 団体の選定理由は、A区において地域とのつながりを重視し、夜回りのようなアウトリーチ活動

やサロン活動を長く継続的に行っており、数多くの路上生活者とかかわりやその実績があると考えたためである。

- 5) 団体の選定理由は、B市において夜回り・炊き出し・相談等多様な支援を長く行っており、多様な背景や課題をもつ路上生活者と関わりがあると考えたためである。
- 6) 対象者の選定法について。A区では支援団体の支援者から、訪問活動のルートを回りながら路上生活者に直接声をかけ、協力の同意が得られた者へインタビューを行った。また、支援者から紹介を受けた利用者で、協力の同意が得られた者にもインタビューを行った。B市では、支援団体の支援者から、事務所に来所していた者、夏祭りに参加している者や河原で生活している者に直接声をかけ、協力の同意が得られた方へインタビューを行った。
- 7) なお、第8回人口移動調査では5年前居住地が現住地と異なるのは30～34歳が最も高く、年齢層が高くなるほど割合が低くなる。1年前居住地が現住地と異なるのは20～24歳が最も高く、年齢層が高くなるごとに割合が低くなる（国立社会保障・人口問題研究所2016：11、13）。また、本稿に関しては現住地が東京都で出生地も東京都なのは54.4%で、全国的に見れば低い数字となっている（ibid：26）。
出生地と現住地の移動理由は住宅事情、生活環境上の理由、通勤通学の便などの「住宅を主とする理由」が最も多く35.4%、ついで「その他」13.8%、就職、転職、転勤、家業継承、定年退職などの「職業上の理由」が12.7%、「結婚・離婚」が12.0%、「家族の移動に伴って」が10.8%と続いている。男性に限定すると「住宅を主とする理由」が最も多く36.1%、ついで「その他」13.3%、「職業上の理由」が18.8%、「結婚・離婚」が10.4%、「家族の移動に伴って」が8.2%となる（ibid：17-18）。年齢階層別にみると「住宅を主とする理由」が最も多く、ついで15～29歳では「入学・進学」「職業上の理由」が多く、30～39歳では「結婚・離婚」「その他」となっている。40～49歳、50～64歳では、「職業上の理由」、「その他」が続く。現住都道府県別理由で見ると東京都は住宅事情（24.3%）、入学進学（12.4%）、家族随伴（10.2%）、結婚（10.1%）、生活環境（9.1%）となっている（ibid：20）。また最終学校卒業後東京都に移動した者の割合は32.6%と、全国で最も高い数字になっている（ibid：40）。
- 8) 田原・神谷（2002）が指摘する“高齢者の生活に必要な条件”は、遠藤（2017）で取り上げた労働、家族・地域、社会保障制度などを含めた“生活を保障する仕組み”と重なるものと言えよう。
- 9) 岩田の研究は新宿、上野、池袋といった東京都区部を中心に展開している。
- 10) 場所に固有な何らかの要素に対して愛着を持っているとき、それが場所への愛着として表出する、反対に場所に固有でない要素に対して愛着を持っていたとしてもそれは場所への愛着として表出しなないとしている（相澤2002：29-30）。
- 11) こうした場合「外側からの場所の観察」が行われ、場所への愛着感は強く意識されることが多いと述べている（相澤2002：30）。
- 12) 遠藤2019bにおいて、居住地への愛着が居住地の移動に影響を与えていたかどうかを判断することは、調査対象者によっては50年近い過去について聞き取りを行うことにもなり、そこに一定の困難性と限界を抱えていることを指摘した。また、初職に伴う居住地移動は居住地への愛着というよりはパーソナルなつながりと職場の場所に左右されている可能性を指摘した。
- 13) 移動先としてB市を選んだ理由として、2021年調査では「俺〇〇市（注：多摩地域近隣市）に住んでたことあって、B市がどういう町かある程度知っていたのと、で、もしも俺を一あの一まあちょっとだいぶ恨まれてもいたので、追っかけ人が来てもまずBだったら北も東も西も逃げれるよなんて思っで。ターミナル駅だから。どっちへも逃げられるよ。そういうこともあってBに定めて…」と語っている。
- 14) その過程で「変な女に引っかかってさ。飲み屋の女の子。で、寮に帰れなくなっちゃった」と当時勤務していた会社とのつながりが絶たれていったことも示唆された。
- 15) JR線が通っているからという同様の理由を多摩居住ケースの寺田さんも挙げている。
- 16) 先述の八木さん、千葉さん、毛利さんや多摩居住ケースの秋元さんも該当しよう。

【引用・参考文献】

- ・相澤亮太郎 (2002) 「神戸をめぐる場所への愛着——ライフヒストリーとエッセイからの場所愛抽出」『兵庫地理』47、pp.23-32
- ・江口英一 (1966) 「貧困研究の視角」『社会政策学の基本問題 (大河内一男先生還暦記念論文集第 I 集)』有斐閣、pp.319-356
- ・江口英一 (1979a) 『現代日本の「低所得層」(上)』未来社
- ・江口英一 (1979b) 『現代日本の「低所得層」(中)』未来社
- ・江口英一 (1980) 『現代日本の「低所得層」(下)』未来社
- ・遠藤康裕 (2011) 「『社会的包摂システムに係る調査』を通して見るホームレスと生活保護制度」『ホームレスと社会』5、pp.91-103.
- ・遠藤康裕 (2015) 「ホームレスと生活保護行政」『社会福祉学評論』第 14 号、pp.19-29
- ・遠藤康裕 (2017) 「第 1 章 路上生活者の住居変遷からみた生活保障の仕組み」『2016 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究』pp.33-45
- ・遠藤康裕 (2018) 「職業・居住の移動から見た路上生活者」『2017 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究』pp.37-50
- ・遠藤康裕 (2019a) 「第 1 章 路上生活者の職業・居住地移動」法政大学社会学部『2018 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅲ』pp.39-52
- ・遠藤康裕 (2019b) 「第 2 章 路上生活者の居住地移動と愛着に関する一考察」法政大学社会学部『2018 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅲ』pp.53-67
- ・遠藤康裕 (2022) 「第 1 章 路上生活者の職業・居住地移動Ⅱ～多摩地域調査を題材に～」法政大学社会学部『2021 年度 社会調査実習報告書 東京都下の路上生活経験者・生活困窮者の生活および支援の諸相に関する調査研究』pp.19-30
- ・遠藤康裕 (2023) 「路上生活者の職業移動・居住地移動に関する一考察—東京都心と多摩地域における路上生活者インタビュー調査を題材として—」日本女子大学社会福祉学科・社会福祉学会編『社会福祉』63 号、pp.107-118
- ・Hidalgo, M. C. & Hernandez, B. 2001 Place attachment: conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, 21, 273-281.
- ・引地博之・青木俊明 (2005) 「地域に対する愛着形成の心理的過程の検討」『景観・デザイン研究講演集』No.1、pp.232-235
- ・引地博之 (2009) 「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—」公益財団法人土木学会『土木学会論文集D』65 (2)、pp.101-110
- ・法政大学社会学部 (2017) 『2016 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究』
- ・法政大学社会学部 (2018) 『2017 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅱ』
- ・法政大学社会学部 (2019) 『2018 年度 政策研究実習報告書 東京都下の路上生活者の生活と排除の諸相に関する調査研究Ⅲ』
- ・法政大学社会学部 (2022) 堅田香緒里・遠藤康裕編集『2021 年度 社会調査実習報告書 東京都下の路上生活経験者・生活困窮者の生活および支援の諸相に関する調査研究』
- ・石黒格 (2018) 「青森県出身者の社会関係資本と地域間移動の関係」日本教育社会学会『教育社会学研究』第 102 集、pp.33-55
- ・岩田正美 (1995) 『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房
- ・岩田正美 (2000) 『ホームレス／現代社会／福祉国家——「生きていく場所」をめぐる』明石書店.
- ・Jorgensen, B. S. and Stedman, R. C. 2001 Sense of place as an attitude: lakeshore owners attitudes toward their properties. *Journal of Environmental Psychology*, 21, 233-248.
- ・垣田裕介 (2011) 『地方都市のホームレス』法律文化社
- ・Kaltenborn, B. P. 1997 Nature of place attachment: A study among recreation homeowners in southern Norway. *LeisureSciences*, 19, 175-189.
- ・国立社会保障・人口問題研究所 (2016) 「第 8 回人口移動調査」
- ・厚生省 (1999a) 『ホームレス数調査』

- ・厚生省 (1999b) 『ホームレス数調査』
- ・厚生省 (2001) 『ホームレス数調査』
- ・厚生労働省 (2003) 『第 1 回ホームレスの実態に関する全国調査 (生活実態調査)』
- ・厚生労働省 (2007a) 『第 2 回ホームレスの実態に関する全国調査 (生活実態調査)』
- ・厚生労働省 (2007b) 『住居喪失不安定就労者調査』
- ・厚生労働省 (2008) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2009) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2010) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2011) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2012a) 『第 3 回ホームレスの実態に関する全国調査 (生活実態調査)』
- ・厚生労働省 (2012b) 『平成 23 年度 ホームレス対策事業運営状況調査』
- ・厚生労働省 (2014) 『平成 24 年「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」報告書』
- ・厚生労働省 (2015) 『ホームレスの実態に関する全国調査 (概数調査)』
- ・厚生労働省 (2016a) 『平成 28 年度 生活困窮者自立支援制度の実施状況調査集計結果』
- ・厚生労働省 (2016b) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2016c) 『ホームレスの実態に関する全国調査 (生活実態調査)』
- ・厚生労働省 (2017) 『ホームレスの実態に関する全国調査』
- ・厚生労働省 (2022) 『ホームレスの実態に関する全国調査 (生活実態調査)』
- ・厚生労働省 (2023) 『R5.1 ホームレス概数調査結果』
- ・Low and Altman, 1992 Place attachment: a conceptual inquiry, In Altmen. I.& Low, S. M. (Eds.), Place Attachment. New York: Plenum Press. pp.1-12.
- ・Riley. R. B. 1992 Attachment to the ordinary landscape. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), Place Attachment. New York: Plenum Press. pp. 13-35.
- ・Rubinstein, R. L. and Parmelee, P.A. 1992 Attachment to place and the representation of the life course by the elderly. In Altmen, I. & Low, S. M. (Eds.), Place Attachment. New York: Plenum Press. pp.139-163.
- ・園田美保 (2002) 「住区への愛着に関する文献研究」『九州大学心理学研究』3、pp.187-196
- ・田原裕子・神谷浩夫 (2002) 「高齢者の場所への愛着と内側性——岐阜県神岡町の事例——」『人文地理』第 54 巻第 3 号、p.1-22